みんなで考える、子どもの未来

あかつき道徳TIME

vol. 03 October 2023

学校現場においても「ファシリテーション力」という言葉が聞かれるようになって久しい。教師にとって、とりわけ道徳の授業において必要とされるファシリテーション力とはどんなものだろうか。
道徳授業の実践力に定評がある先生方に語っていただきました。

道徳授業に求められるファシリテーション力

荊木聡
（園田学園女子大学准教授）
貝塚市立中学校教諭、兵庫教育大学大学院修士課程修了、その後大阪教育大学附属天王寺中学校教諭を経て、令和２年より現職。

岩井晃子
（大阪大谷大学特任教授／教職教育センター長）
大阪府公立中学校教諭を経て、大阪府教育センター指導主事、主任指導主事を歴任。その後、公立小学校・中学校の校長を経て、令和２年より現職。

道徳授業におけるファシリテーション力とは

岩井　中央教育審議会特別部会の中で、令和の日本型学校教育において、ファシリテーション力は教師に必要な資質・能力とされています。

荊木　ファシリテーション力がなぜ求められるのか？　予測の難しい激動の近未来社会においては、自分で答えのない課題を見つけ出し、それに対し自分で最適解・納得解を見つけていく力が求められます。そういった主体性・自主性を培うために必要なのがファシリテーション力だと思っています。マラソンでいう「伴走者」のイメージに近いです。

岩井　「伴走者」、いいですね。これも、令和の日本型学校教育における教師の理想的な姿として、答申の中に出てきますね。

荊木　はい。お膳立てして教え込むのではない、子ども自身が気づき学んでいくような伴走者でありたいと常々思っています。

岩井　現場の先生方のお悩みとして、子どもから出たよい発言をうまく拾えなかったり、いつも手を挙げている子ばかりを当ててしまったり、教

師からの一方的な説話になってしまったりするなどといった声をよく聞きます。どうしたら五十分の授業で子どもが学びを得られるか。そんな授業を成立させるのが、伴走者たる教師に必要なファシリテーションの力なのではないでしょうか。

道徳授業をファシリテートするには

荊木　道徳授業におけるファシリテーション力を定義してみると、「学級において、一人一人の児童生徒の、個性的で異質な見方や考え方を可視化し、論点を緻密かつ多面的・多角的に捉え、議論を活性化する力」といえるのではないでしょうか。それは例えば、ねらいに向けて多様な展開を想定し、準備しておく力であったり、議論を可視化し、論点を緻密かつ多様に捉える力であったりすると思います。

岩井　おっしゃることはよく分かります。そのような力を使って道徳授業を深めるために、具体的にはどのような技術が必要とされているのでしょうか。

荊木　例えば、仕込み・準備はファシリテーションに必要な技術の一つと言えるでしょう。授業者が「本当の思いやりとはどんなものなのか」など、内容項目に対する理解が不十分なまま授業に臨むと、子どものよい発言にも引っかかることができません。

岩井　そうですね。子どもの発言を拾って、それを深めていくためには、事前に「学習指導要領解説」を読むなどして、内容項目を理解しておく必要がありますね。また、自分が立てた指導案通りに、最後まで進めていかなくてはいけないと思ってしまっている先生も多いように思います。そのせいなのか、発問と発問のつながりがなく、ぶつ切れになってしまっている授業をよく見ます。道徳授業は結論を出すものではないですし、予定通りにいかないことこそが道徳の醍醐味なのにな、と思います。

荊木　指導案は、ねらいに近づく複数のコースのうちの一つしか示していません。指導案に書いた発言と違う発言が出ても、そこからまた新たなコースを通ってねらいに近づけることができます。そのためには、子どもたちの意見のどこに目を向けて次の発問につなげていくのか、ということを考えておく必要があります。このような準備段階の入念な考察というのはファシリテーションの力といえるでしょう。

岩井　タイムマネジメントも大きなファシリテーション力の一つです。例えば、子どもたちに教材の内容を理解させるのに時間がかかるという先生の悩みをよく聞きます。前の時間に読んだり、板書の工夫をしたりして、「この時間に考えたいこと」に時間をかける意識が大切です。「共有化」「視覚化」「焦点化」という授業のユニバーサルデザインにもつながります。

荊木　他にも、論点を多様に把握する技術も、授業を深めるためには重要なファシリテーション力といえるのではないでしょうか。例えば、子

子どもと共に学ぶことで、教師も自分自身の生き方について考えられるようになる。そんな道徳授業を目指したいですね。

どもの発言に対して「いいね。」「そうだね。」だけで終わらせずに、「どうしてそう思ったの?」「どんな経験からそう思ったの?」など、その発言の背景にあるものをあぶりだすことができると、よりいっそう授業が深まるでしょう。

岩井　学び合いの場づくりにも注目したいです。「授業」は、子ども一人一人が本来もっている内面の力を学級という集団の場で引き出していく相互作用です。その大前提として、「この場で何を言っても受け入れてもらえる」という安心感のある「場」であることが大切です。

ファシリテーション力で何が変わるのか

岩井　道徳授業に必要なファシリテーション力について、技術の面も含めて具体的に話してきましたが、道徳授業におけるファシリテーション力で、何が変わると思いますか?

荊木　子どもたちにとっては、見方・考え方が広がり深まるのが直接の効果でしょうね。そして、そうすることで何が起きるのか。なんといっても、子どもたちは授業が待ち遠しくなります。また、教師にとっても、道徳授業でしか見ることのできない子どもたちの新しい側面を知ることができます。

岩井　それから、教師にとっては、自分の生き方について子どもと共に学ぶことができたという達成感も味わえるでしょう。自分の生き方について考えることでリフレッシュできるチャンスにもなります。また、納得のいく道徳授業ができるようになることで、自分の「授業力」や「子ども理解力」に自信がもてるようになります。

荊木　本当にそうですね。先生方には、子どもたちと一緒に道徳授業を楽しみ、新たな発見をする喜びを共に感じ歩んでほしいと思います。

子ども自身が気づき学んでいくような「伴走者」でありたいものです。

道徳授業が深まるファシリテーション	
仕込み・準備	内容項目の理解、ねらいへの道筋の想定など。
タイムマネジメント	教材理解に時間をかけすぎないよう、事前にすませたり場面絵を活用したりする。
議論の可視化	板書計画を作成し、予想される意見のグループ分けをしておく。
論点を緻密に把握する	「何が問題か？」(What)、「どこが問題か？」(Where)、「何が原因か？」(Why)などをあぶりだして、議論を始める土台づくりをする。
論点を多様に把握する	子どもの意見の背景にある部分（思考のプロセス）を掘り下げる。
学び合いの場づくり	安心して発言できる学級の雰囲気をつくる。また、子どもの発言を「受容」する姿勢をもつ。

第3号　2023年10月1日発行　あかつき教育図書株式会社　〒176-0021　東京都練馬区貫井4-1-11　電話03-3825-9188(代表)　https://www.aktk.co.jp

道徳授業実践のプロに聞く

教師は「キャッチャー」である

松原弘
(大阪府和泉市立郷荘中学校教諭・教務主任)
年間100回以上の道徳の講演と80回以上の飛び込み授業を実践。日本道徳教育学会評議員等を歴任し大阪府道徳教育指導教諭として道徳教育を牽引。共著『対話的で深い学びのある道徳科の授業をつくる』など著書多数。

十五分で中心発問に入る

五十分でどう授業を深められるか、ファシリテーターとして、それを大切にしています。教材にもよりますが導入と範読、内容整理を十五分で収めて中心発問に入ります。終末のまとめを十分とすると展開にあてる時間が二五分しかないからなのです。

範読後の内容理解も説明するだけで簡単に済ませます。ただ生徒の表情を見て理解が追いつかないと感じた時には、その後のグループでの話し合いの際、内容理解について生徒間で補い合わせるようにしています。

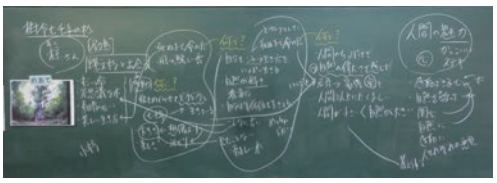
どうしたらねらいに迫れるのか

例えば『木箱の中の鉛筆たち』という有名な作曲家の父を前に自分には才能がないと絶望する娘が再び夢を追う教材。「娘のカンナはどんなことを思ったの?」という問いに対する生徒たちのさまざまな意見の中から、ねらいである「向上心」につながるヒントがあるものを拾い「これはどういうことだろう?」と問います。基本的に私は初発問の次からは生徒たちの意見から問いを選択し深めるようにします。まさにこれがファシリテーターとしての役割だと思っています。

生徒たちは語彙は少ないけれど、教師が思っている以上にねらいとする価値をしっかり考えています。教師はそれを受け止めていくだけでよいのです。「教師はピッチャーでなくキャッチャー」だとかつて恩師に言われましたが、まさにその通り。ここで大事なのは生徒の意見をフラットに受け止めることで、教師が欲しい答えに飛びついてはいけないのです。

板書の右上のテーマに向かう流れ

基本的に私の板書は横書きです。最初は右上にテーマとして「人間の魅力を考える」と書き、左から右へ流れていく板書です。例えば『樹齢七千年の杉』という教材では、筆者の感動の正体を探っていく展開で、何に感動したのか、What の発問から、なんで感動するのか、Why の発問へと深めていくのに従い板書は右へスライドしていきます。Why に対する生徒たちの考えが出てきますが、そこからが時間との勝負です。さらに「それはどうして?」(Why)とかぶせると、生徒たちは「まだ聞くか!」となりますが、そこを考えるのが道徳です。そして自然の魅力は分かったけれど、人間の魅力は何か、最後に問います。このように板書を使って生徒たちの考えを整理していくのです。



『樹齢七千年の杉』(あかつき教育図書)の板書例

ファシリテーション力から授業力へ

色々な工夫を紹介しましたが、私も道徳を始めて間もない頃は、価値の一方的な押しつけや、指導案に無理やり沿わせる授業をしていたように思います。授業経験を重ねるだけでなく、他の先生の授業を見て教師と生徒たちの関係や場の雰囲気も合わせて感じ取ることで、道徳授業のファシリテーション力がつき、授業力の向上につながっていくのではないでしょうか。

本資料は、一般社団法人教科書協会の「教科書発行者行動規範」に則って作成しています。